

# 魔法少女とチートな次元犯罪者達

R.H.N

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

次元世界を股にかけ、時空管理局から名指して指名手配されているとある次元犯罪者たち、日本のセーフハウスでゆっくりしていた彼らは、仲間の通信で「ジュエルシード」なるロストログアが日本にやって来た事を知り、ジュエルシードの搜索を始める。

それが次元世界を股にかけた、彼らと、魔法少女達との壮大な物語の始まりとは知らずに・・・

時空犯罪者視点の魔法少女リリカルなのは、みたいな感じで執筆される作品です。

ただし、キャラがぶつとんできますし、オリジナル設定も大量にあります。

多分、不定期かつドン亀更新になると思います。

その他、色々な要素やオリジナル設定が後々入って行く予定になりますので（クロスオーバーの予定あり）、作品を読んでいて（自分には合わない方）と思われた方はブラウザバックする事を推奨します。

「大丈夫だ、問題ない」という方はどうぞ読んで頂けたらと思います。

# 目次

## 無印編

ジユエルシードを求めて	1
翠屋と運命の出会い	9
魔法使いと魔法少女。	17
答え合わせ、そして・・・	24

## 無印編

### ジュエルシードを求めて

〜世界、年の某日、日本の某所にて〜

「6来い6！（コロコロ）・・・10かよ！やっぱ!!」

「うっしや！木材4枚ガツポガツポ（。D。）ウマー！でウハウハよ、これで盗賊がこなけりや最長交易路を奪取して俺の勝ち確だあ！」

「くっそ！なにも出来ない！ターン終了！」

「んじや私つと（コロコロ）・・・あ、7」

「ぬわああああ盗賊だあああああああああああ！」

「それじゃあまあ序でに霸天から資源を頂戴・・・あ、鉄、んじやその開拓地を都市化して、終わりッ！勝利ッ！」

「ぐわああああああああ！この俺が負けるだとおおおおとおおおおとおおおお！」

「霸天・・・お前ホントボドゲだと肝心なところで炎上して負けるなオイ」

「順位的にはトップが優樹菜、次点で9点ギリギリで負けた霸天、その次が7点の私、そしてビリが最長交易路を死守した6点の永次郎かあ、つてか事の外激戦だったわねえ」

この日、日本のとある場所では金髪碧眼の美少女と、金髪ロングヘアーに赤色の瞳をしたおよそ20代前半と思われる女性、黒髪で武人と思われる風体の男性と、そして、白髪混じりの黒髪で、右目が藍色、左目は黄緑色という珍しいオッドアイの青年が一同に集まり、深夜遅くだと言うのにボードゲームに興じていた。

「中々の激戦だったなあ・・・次何やる？、ドミニオンとか街〇口とかいろいろあるけど？」

「ぬうう、こうなれば魚〇戦ゲームで勝負！」

「クソAIMのお前が〇雷戦やってもボコられるだけだとおもう

ぞ……」

「UNOとかはさつきやつちやつたしねえ……」

「大○豪での6連続革命からの反則都落ちには流石に笑ったなあ……カード片寄りすぎやろと」

「永次郎のポーカー初手フルハウス↓初手フラッシュ↓初手フォーカードっていう三連続の鬼引きもアレだったけどね」

やっていたボードゲームが一先ず終わり、ついさつきまでの激戦を思い出したり、何をしようかと次を探したりと四人が思い思いにしようとしたその時、一本のテレビ電話が入ってきた。

「ん?どした?」

「悪い、ハマやらかした、そつちの方にトンでも無いもんが行つちまつたから俺が帰還するまでそつちで対処頼めないか?」

テレビ電話にでた四人組共通の友人は、テレビ電話にでた直後にそう一言告げた。

「ハアアアア(´Д、)!?」

……この四人組と、後に「魔法少女」と称される少女達との物語は、ここに始まるのである。

オープニング、次元犯罪者達はジュエルシードを探し始めたそうです。

「ジュエルシード……どうしてそんなものが……」

テレビ電話越しに聞いた話によって頭を抱えだしたのは、先程のボードゲームで勝者となっていた金髪ロングヘアで赤目の女性、村ノ瀬 優樹菜（むらのせ ゆきな）である。

「願いを叶える宝石ねえ、要するに願い叶えるために使う体のいい近道って訳か、面白味がねえなあ」

「いやいや、そもそも何をどうすれば発掘したばかりの遺跡からの遺物だったその宝石がこの世界にやって来るのよ?」

先程のボードゲームではギリギリのところまで負け、ジュエルシードなる宝石について聞き不満げに呟く武人風の黒髪男性は天ヶ瀬 覇天（あまがせ はてん）、状況に今一納得できず思わずぼやく金髪碧眼の美少女はアウドムラ・ノードレットとそれぞれ言い、テレビ電話越

しに話する四人組共通の友人である男の名は、ウエルダン・ラインラントと言った。

「・・・ちと込み入った事情があつてな、もともとそのジュエルシードは俺が見つけた代物じゃねえんだわ」

「いやまあアンタにそんなものに対する興味なんて基本ないからアンタが拾ってハマした何て言われても信じられないだけどさ」

「アウド、相変わらず俺に辛辣だな（・・・）、まあいい、話を続けるんだが、この宝石を発掘したのがまだ10にも満たないであろう子供でなあ、」

「あつ・・・（察し）、あれはロストログアだから管理局へジュエルシードを届けようとして輸送屋に任せて・・・」

「当たり前、その輸送屋が管理世界に物理兵器の密輸やらかす違法操業してるアカン会社の所属だったから、俺が襲撃かましてジュエルシードパクってアウドに対処任せようとしたんだよ」

「そしたら輸送してた船が予想外にボロだった十相手の操舵がへなちよこ過ぎたせいでわざと外すようにパなした牽制射撃に自ら船体をつ突っ込ませて輸送船は木端微塵、ジュエルシードは輸送船から飛び散って何故か全部纏めてそっちへ・・・という寸法だ」

（アカン）

事の経緯を話した瞬間、四人は白目を剥いた・・・が、すぐに四人とも持ち直す。

「《タイミング》は合わせなかったのか!？」

「やる必要も無いだろうと高くくつた、スマン」

「ウエルダン・・・お前何やらかしてくれてんの？」

「すまん、話はさらに続くぞ、かなりヤバいことに、発掘者の少年、違法操業してた輸送船の会社が事態の誤魔化しを図って俺の輸送船襲撃を事故扱いしたために自責の念に駆られて一人でそっちに向かったらしい、おまけに輸送船が派手にぶっ飛んでジュエルシードに影響与えたのかその場で次元振が起こってな、管理局に捕捉されたっばい」

「お前何やらかしてくれてんの？（二回目）」

「だから悪いと言ってるじゃん！、あ、そうそう恨み晴らしに俺は件の違法操業会社を潰す（物理）してくるからジュエルシードはそつちで対処頼む！本当にスマン！」

ウエルダンがくれた追加情報により更なる怒りを二度にわたりぶつけるのは白髪混じりでオッドアイの青年、天城 永次郎（あまぎ えいじろう）、先程のボードゲームではビリだった男でもある。

彼は彼はウエルダンのやらかしにかなり怒り心頭ではあったが、しかしその表情には半ばの諦観と呆れが含まれており、実際、すぐに彼は諦めたかのようにため息を吐いたのである。

「．．．．（ ー ー ー ） 3、仕方ない、こっちは何とかしとくから違法操業野郎はたのむぞ？」

「管理局にここバレたらせつかくのセーフハウスがががが．．．仕方ないわね、違法操業連中ボコすのしくじったら許さないからね！」

「こんな危険物放つぽる訳にもいかんし、久しぶりに動くかあ、あ、ウエルダン、ボコしついでに何か良さげなお土産頼むわ」

「管理局がこの地球にやって来る可能性が高い以上、動いても引きこもりしてても気づかれる可能性は一緒ですか．．．折角ですしジュエルシードの回収初めてしまししょうか、ところでウエルダン？具体的にどこにジュエルシードが行ったか分かります？」

「ちよつと待ってる．．．日本の海鳴市って所らしい、セーフハウス（永次郎宅）が日本の首都にあるんだっけ？、とすれば比較的近いんじゃないか？私立聖祥大学付属小学校、って所らへんから辺り一帯に幾つかの反応があったなあ．．．」

「海鳴市？何処そこ？」

「聖祥大付属？あー、彼処かあ．．．」

「知ってるの永次郎？」

ウエルダンから出た学校名を聞きなにかを思い出した永次郎、アウドムラがそれに言及すると、永次郎は知ってる限りの事を喋り初めた。

「彼処には私の知り合いが経営してる喫茶店があつてね、話にあつた



小学校は彼の娘さんが通ってる所なんだよ。」

「・・・下手したらその人も巻き込まれる?」

「それもそうだが、彼処、割りと自然が豊富な地域で、なおかつベッドタウンと教育施設が複数箇所ある程度まとまってる地域でな、私の知り合いとかそんなの関係なしに大住宅地近くを次元災害クラスに丸々巻き込む可能性がある」

「わーお・・・ヤバイなんてもんじゃないわね、早いところ行かないきゃー!」

永次郎は一人の少女を思い出し、その子の話をするが、それで焦ったアウドムラが永次郎をせかす。

「待て待て、別の次元世界出身のアウドと覇天はともかく、此処に戸籍持つてる私と優樹菜は変に怪しまれないためにも正規の手段で向かう必要がある、ここから話の小学校までは車使うと丸半日かかるぞ? 流石にこの時間となると私眠いんだが?」

「それもそうね、流石に夜遅すぎて電車止まってるしどうしたものかしら、私と覇天はその辺無視できるから気楽なんだけど、」

「アレなら俺達は先に現地向かつとくか?」

「あのなあ・・・」

その気になつたら二人で先行する気満々のアウドムラと覇天、アウドムラはともかく、覇天は何を理由とするのかはわからないが、急いで現地向かおうとする二人を制止しつつ、永次郎が眠気を押さえながら話し続ける。

「取り敢えず今のところは覇天の感にもアウドムラの知らせにもロストロギアが大きく動いた反応はないのだろう?、明日で良くないか?」

「申し訳ないんですけど私も眠気が・・・永次郎に同意させて頂きます、ジュエルシードの散らばってる辺りの地理には永次郎さんに宛があるみたいですし。」

「その様子だな、そうだヴェルダン、ついでに聞くが他の連中は来れそうにないのか?」

「【風の亡霊】は相変わらず表の顔で活動中、【生命の専門家】はあいつ曰く「私の研究に全面的かつ壮大な喧嘩を売ってきたドアホ」と言うほどに興味を引くやつを見つけたらしく、所有戦力をけしかけて戯れるからと断られた、【巡りの絵描き】も相変わらず絵を売り歩いている様子だから声かけられなくてな、頼れるのは現状お前らだけだ。」

「それならしゃーないか」

「スマン、そういうことだから頼む、本当にスマン！」

ヴェルダンはそう言うのと頼み込むようなポーズをしながら通信を切る。

あとに残った四人は、以降の行動について、改めて話し初めることとなる。

「んで、移動に関して何だけど」

「移動に関しては優樹菜が乗ってきたキャンピングカーが良いだろう、現地のビジネスホテルとかを拠点にするよりは、今ある移動拠点を利用した方が良いだろうし、運転は優樹菜任せになるから出発は明日にすれば良い」

「・・・それもそうね、じゃあ明日準備しつつ現地に出発、現地で優樹菜の車拠点を探し初めるとしますか」

「言うわけだ、スマン優樹菜、車頼むぞ?」

「お任せあれ、と言わせて頂きます」

翌日、四人を乗せた一台のキャンピングカーが色々と荷物をのせて都内某所を出発した。

行き先は、ロストログアと呼ばれる危険物、「ジュエルシード」の在りか、海鳴市。

四人の犯罪者たちの物語は、まだ始まったばかりである………

【続く】

## 翠屋と運命の出会い

「……やっとなつたわね、ここが永次郎の言ってた喫茶店であつてるよね？」

「なぜ確認するように聞いた（：？口？）？アウドの言うとおり、ここが私の知り合いが経営する喫茶店、名を翠屋と言う所だ」

私の名前はアウドムラ・ノードレッド、次元世界を又にかける次元犯罪者。

魔法に一家言持っていること、そこそこ付き合いの長い交遊関係が自慢。

今日は友人の頼みもあり、ジュエルシードと言うロストログア（私を指名手配してるところ曰く、超危険物の総称らしい）の回収のため、同じく友人である永次郎と優樹菜の出身である地球（別称、第97管轄外世界、しかしこの呼称を二人は蛇蠍の如く嫌がる）の日本国は海鳴市、そこにある永次郎の友人が経営する店、翠屋と言うところにやっとなつて来た。

（折角だしとジュエルシードを私の【コレクション】に加えようか考えてるのは内緒の余談である。）

「さて、入り口付近でたむろするのもアレだし、早速入るとするか！」  
「永次郎の言っていたケーキ、地味に私も気になるんです、どんなケーキなんだろう？」

（カランカラン）

「士郎、久方ぶりに邪魔するぞ」

「お邪魔します〜」

永次郎が店のドアを開けると、店員と思われる一組の男女がいた。

「おお！永次郎さん、お久しぶりです、お元気そうで何より」

「そつちも元気そうで何よりだ、ああ桃子さん、そちらもお元気そうで何よりです」

「あら、お久しぶりです永次郎さん、そちらの方々は？」

「私の友人さ、まえ来た友人の妻である優樹菜、それと前々から話にしていたアウドと覇天だ。」

「どうやら永次郎とこの店のご主人たちとはそれなりに長い付き合い合  
いみたいだった。」

「再会の余韻も他所に、私も自己紹介することになる。」

「村ノ瀬 優樹菜です、宜しく願います」

「話に出てるんなら事は早い、私が天ヶ瀬 覇天と言う者だ。」

「アウドムラ・ノードレッドと言います、永次郎から話は聞いてると思  
いますが、宜しく願いますね、」

「高町 桃子です、宜しく願います」

「高町 士郎です、覇天さん達のお話は永次郎さんから度々、今日は宜  
しく願います。」

「……いやいや桃子さん、何でアウド達もそうだけどそんなものも  
のしい雰囲気になってるの？」

お互いに挨拶してる所に突っ込みを入れる永次郎、そりやそうだ、永次郎はともかく私達は本来客の範疇は越えないハズだし、それは私達の視点で言う桃子さん達も一緒だ、だけど。

「そりやあ、なあ？永次郎がわざわざ進めてくるほどの物が如何程なのか気になるからなあ」

「お話にあった【伝説のマジンシャン】と【武神】、それに桃子の出したデザートの隠し味を、デザートを見るだけで看破してのけた恐ろしい御仁の奥方ですからね、私のデザートがどこまで通用するのか気になるのはパティシエとしては当然でしょう？」

雰囲気から察してはいたが、やはり永次郎は私たちの事を良く話の種にしていたようだ。

翠屋に足繁く通う永次郎の手によって、優樹菜異世界出身である私達（優樹菜は除く）は、地球においてそれぞれの得意分野に応じたこの世界での立ち位置を確立しており、私はマジンシャン、覇天は武人として業界の知る人ぞ知るレベルの有名人になっている。

私的には単に大の親友である永次郎が進める翠屋のデザートが気になったただけだが、覇天や優樹菜はそのデザートに大して真剣な思いをしているようで、桃子さんもパティシエとして本気を出そうとしている様が見える。

そんなわけで互いの興味が引き合い、いつのまにやらこの場は永次郎が困惑するレベルの真剣な場となっていたわけだ。

あれから少し経ち、私達は店の一角に座り注文を済ませ、注文したデザートを待つ身となった。

「……なあアウド、」

「何？」

「この辺にジュエルシードらしき反応はあるか？」

永次郎から目標のブツについての話が出たので、話をしておく。

「ロストロギアレベルの強大な魔力反応はないわね、まあ、地球の一般人と比べると明らかに魔力の桁が3, 4つ違うくらいの反応はあるけど」

「えっちよつとまってソレ大丈夫か？（\*・D・）」

「確かに、魔法使いとして多少才能があればミッドの一般平均値位の管理局員を軽くボコせるくらいのスペックはありうるけど、地球で魔法使って管理局員関連以外は先ず見ないし、それ以上に地球に来てる管理局員なんてグレアムのじーさん位だから大丈夫よ、」

「……グレアムのじーさんが嗅ぎ付けた可能性は？」

「グレアムのじーさんと考えするには反応は弱いわ、あのじーさん、クツソ優秀な使い魔とコンビとはいえ私ですら相手取るの嫌がるレベルではあるからね、彼が近くにいたらヤバイ使い魔の反応も近くで感じる事になるから嫌でも意識する羽目になるわ」

……ギル・グレアム、私達と敵対し、追跡者として立ちはだかる組織「時空監理局」の提督である。

昔のとある事件で縁が出来、以来何度も追われる羽目になっていく。

魔法使いとしてはチートも良いとこの私を除けばその実力は折り紙つきで、特に二匹の使い魔との連携は私をして再戦を嫌がる程である。

最も、何度も遭遇したせいで私の感じとる魔力の中では簡単に思い当たる範疇だし、私の感知でその反応がないということは、彼は少なくとも日本にはいないことになる。

今は気にしなくて十分だろう

「・・・ジユエルシードの件を管理局に掴まれた可能性があるがそれは大丈夫か？別の次元航行部隊が来てる可能性は？」

「そうだしとしても一先ずは大丈夫でしょうね、この場合、状況を掴んだとしたら先ず管理局は地球近くの次元の海を巡航してる艦を動かすでしょうけど、その場合、地球近くに大規模展開してる彼のテリトリーに入り込むことになるわ」

「・・・それ、管理局の軍艦が沈んでどえらい事になるんじゃない？」

「今、件の海域に展開してる艦隊は、第7艦隊だからその辺も心配要らないと思うわ」

「第7艦隊か・・・とすれば一応は大丈夫なのか？」

「大丈夫でしょうね・・・ちよつと待って、さっき言った魔力反応、こつち来てるわね、しかも、やけに強いのとそれで霞んでるだけで普通に強い反応が・・・三人ぐらいかしら？」

「(；。D)」

他の人には聞いてもわからないであろう相談を永次郎としながら取り敢えず注文したケーキを待つ・・・と思ったら、ここが地球だと考えると私ですら驚くレベルの魔力を持つ人物が複数、此方に向かってきてることがわかった。

「・・・大丈夫なのか？」

「大丈夫じゃない？、ここ日本だから魔法使うと色々アレだし、やばくなったら私が動けばいいだけだし」

「……………それを否定出来んこの身が嘆かわしいよ」

……………「本気を出していないため」、やってくる人の正体は私にはわからない、しかし、それがどれだけの存在であろうと感じ取れる反応は



片手間で対処可能な範疇を越えていない事を示し続けている。

永次郎も私が本気を出せば魔力の反応だけで具体的にどんな人物なのかをはつきり思い浮かべられる事を知っているが、そうしたくない私の事を尊重し、あえて現状の情報でどうにかしようとしているのが分かる。

隣で注文したデザートを待つ優樹菜と覇天も私たちの話に気づいているが、特に気にしてる様子はない。

そんな事を思っていたら、店の扉が開き、話に出していた人物が中に入ってきた……………そう、入って来たのだ……………。

「ただいま〜」

「お邪魔します〜」

のほほんとした表情でやって来たのは小学生くらいの女の子が三人。

緩やかなウェーブの紫髪をした少女。

気の強そうな金髪少女。

そして、二人に挟まれ、肩にフェレットをのせている茶髪のツインテ少女。

永次郎は彼女たちを見て口をあんぐり開けている。

覇天はなにか面白いものを見たように口をニヤつかせている。

優樹菜は我関せずとデザートを待っている。

私は確信した。

席を立ち、己の衝動のままに彼女達に近づく。  
急にやって来たからか、三人に軽く引かれる。  
そんなの関係ない、私はこう告げる。

「ねえねえそこのお嬢ちゃん達、私の魔法を習ってみない？」

その場は一瞬静まり返った。

「お前なに言ってるんのおおおおオオオオオオオオオオ!?」

そして永次郎の絶叫がこだまりました。

## 魔法使いと魔法少女。

「え？え？え？魔法？ちよつと待ってどういうこと!？」

「どういう事も何も、そのままの意味だよ?」

永次郎の絶叫の後、困惑を隠せず問いただしてくる金髪の少女。

「え、えーつと・・・魔法、つて」

(えーつと、えーつと・・・もう魔法が使える、なんて言えないなあ・・・どうしよう?)

「すずかちゃん、アリサちゃん、なのちゃんちよつとタイム良いかな?」

「……………あ、永次郎おじさん」

「お久しぶりです、永次郎おじさん」

「永次郎おじさん、お元気でしたか?」

「ふぐおつ!」

三人の事を知っていたのか、永次郎がそれぞれを名前で呼んで話を中断しようとする。

……………が、そうしようとする前におじさん呼ばわりされて勝手に精神ダメージを受ける始末である、なにやってんの。

「ところでおじさん、タイムってなんで?この人の言ってることとなにか関係あるの?」

「あら、私としたことが自己紹介もまだだったわ、ごめんなさいね」

「そ……その辺も含めて三人に話があるんだ、ちよつとこのバカ含めた五人だけで話せる場所無いかな?」

「永次郎……………バカは無いでしょバカは」

「知ってる人間からしたら大バカ以外の何もんでもねえわ！話を端折りすぎだ！」

「端折って無いわよ！ってか端折れる所無いわよ！これ以上どう説明しろと言うのよー！」

「小学生に魔法だの何だのレベルが高すぎるわ！」

(ワーギャーワーギャーザワザワボコスカ)

「えつと……………奥の部屋使いますか？」

「なのちゃん!？」

「他ならぬ永次郎おじさんが言うんだし……………何か重要なことなのかなって思っただんです」

「確かに永次郎おじさんがここまで慌てるのは初めて見るけど……………」

「おじさん、その怪しい人っておじさんの知り合い？」

「……………私の親友だ、かなり長い付き合いになる」

そいえば、自己紹介してなかったなと思っただら話をぶった切った場所を移そうとする永次郎。

序でにバカと言われたので反論したらそこから口論に発展し、暫く永次郎と低レベルな罵りあいをしたが、なのちゃん（永次郎の言葉から）の提案で家の中に上がり、話をする事となった。

序でに、最後の永次郎の言葉は、不本意そうな口調ではないけど、永次郎の言葉の端に「これ言っても良いのだろうか」と言う雰囲気は漂っていた。

言葉の通り永次郎と私は随分古い付き合いであるが、実は翠屋の店主である土郎さんにはその期間で負ける。

それでも覇天達と比べると私と永次郎とは随分長い付き合いになるのだが、まあ、私の気分で随分振り回していたと言う側面がある。

故に回答の歯切れが悪かったのだろうか、と思いながら、なのちゃんに連れられ部屋に連れられる。

デザートは後回しだが、家にかかること自体は高町夫妻からさらりと許可が降りた。

永次郎は随分古い付き合いだと昔いつていたが、さらりと許可してくれる辺り相当である。

結果。

せつかく話す機会ができたので、最初からぶつ込む事とした。

「それじゃあ話を再開したいのだけど……お嬢ちゃん達、名前は……ムギユツ！」

「まずは彼女の紹介をしておこう、彼女の名前はアウドムラ・ノードレッド、なのちゃん達には世界を又にかけたマジシャンとして話している奴だ」

「えっ、この人があのアウドムラ・ノードレッドなの!？」

「凄い……テレビで見たことはあるけどまさか本人と出会えるなんて……」

彼女達の名前を聞こうと思ったら先に口を塞がれて、私の紹介を勝手にし始めた、後でやろうと思ったのに。

「あつ、私、高町なのと言います、アウドムラさん、よろしくお願ひします。」

「アリサ・バニングスよ」

「月村すずかです、あ、あの!、後でサインお願いしますか?」

「……なるほどね、喜んでさせてもらうわ、サイン書いて欲しいものを後で渡してくれればね、」

「あ、ありがとうございますっ！」

彼女達の反応を見て、やっと永次郎が口を塞いだ理由に気がついた。

彼女達は私の表の顔をよく知っていたのだ。

永次郎がここに来る度に話していたらしいから当然のはずなのだが、それを失念していた。

ついでに言えば、なのはちゃん達の事も、翠屋から帰って来た永次郎が土産話に話してくれていた子だと言う事に今更気がついたのである。

まあ、結局この後やることに変わりはないのだが。

「それじゃあ改めて、なのはちゃん、すずかちゃん、アリサちゃん、魔法使いに興味ある？」

「結局言うこと基本変わらないのな……………」

「……………ダメ？」

「……………まあ、いいか、それとは別の話もあるし、一挙に処理してしまおう。」

「ねえねえおじさん、アウドムラさんって……………」

「その前に話さなければならんことがある、アウド、【実演】頼む、まあ、名刺でいいかな？」

「任せなさいっと」

諦めたかのように手を振る永次郎、未だに状況が掴めてない三人に対し、説明を含めるためか、私に魔法の実演を頼んでくる。

私はその言葉に軽く返すと、さらりと魔法を発動させ、私のポケットにしまっていた小さな白の厚紙3枚といくつかのペンを空中に浮かせ、その場で名刺を書き上げる。

ついでにサインを求められたすずかちゃんには、裏にマジシャンとして使っているサインを足して、そのまま三人の目の前に乗せてあげた。

「わあーありがとうございますっ！アウドムラさん！」

「……………凄いわね、ほんの数秒で名刺を複数枚、それも機械を使わず紙とペンだけで1度にだなんて」

「まあ今のこれを見てくれたから多少は解るかなと思うんだが、この世界に魔法は存在している、ついでに言う魔法使いもね。」

「確かに今のを見せてもらったらそう納得せざるを得ませんけど……………でもどうして私たちなんですか?」

「そうだな……………まず、魔法のかなり分かりやすい問題点としては、そもそも魔法は使える人と使えない人が存在している才能の問題があることだな、すずかちゃん達はその才能があるが、私はそれを持ち合わせとらん、」

「じゃあアウドムラさんはその才能を持っているから魔法が使えたと言ふこと?」

「大まかに言えば間違いない、が、アウドは例外だ、ついでに言うときさつき席にいた残りの二人、あれはなのちゃん達には「流浪の武人」と「偽善怪盗」の名前で話していた当人なんだけど、魔法が使えるのは「偽善怪盗」の方だけで、更に言えば魔法使いとしてはアウドほどじゃない、魔法がどれだけ上手いのかも、魔法の方向性も又当人の才覚に大きく左右されるんだよ」

「それと……………今のうちにアウドを援護しておく、アウドがテレビで使うマジックの類いは、魔法を一切使用してない真正正銘のマジックだ、「奇術怪盗」直伝の、と言うただし書きがつくけどね」

「……………一瞬、アウドムラさんのマジックって魔法を使ったインチキなの?と問い詰めそうになりました、ごめんなさい」

「アリサちゃん!」

「ふふふ……………そんなに思い詰めなくて結構よ、むしろ、私としてはいきなり信じ込まれる事の方が困るからね」

なのはちゃん達に魔法を見せた後は、永次郎の話は順を追って滞りなく進められていった。

少なくとも魔法と魔法使いにの实在性に関しては難なく受け止めて貰えたようである。

(尚、話にある「流浪の武人」は覇天を、「偽善怪盗」は優樹菜の事を



指している、要するに私が地球上で活動するに辺りやっっているマジシャン活動のタネは、そのすべてを優樹菜から教えてもらったもので賄ってるのだ、私の人にはあまり言えない秘密である。」

「でも、何で私たちに魔法を教えようとしてくれたんですか？、それこそ素質だけなら他の人にも持つてそうなのには？」

「いくつか私の知る現状からすると見逃せないことがあるからね、なりふり構わず動くのもアリかなと思ったのよ。」

「なりふり構わず？」

「……………それじゃあ、そこで固まってるのはちゃんも含めて、1つ問題を出しましょうか？」

「……………ふにやつ!？」

(そっちのフェレット……………ああ、成る程ね)

「……………どうしたの、なのはちゃん？」

「おおかた、おじさんの話が本当で、しかも目の前にいるなんて事になったからビツクリしてたんじゃない？と言うかちゃんと話聞けた？」

「にや……………にやはは……………そんなところだね……………大丈夫、一応話は聞いてたから……………」

「それはホントなの？……………大丈夫かしらねえ？」

実は私たちが魔法の事を話始めた辺りからずっと呆然としていたなのはちゃん、私も永次郎もその理由に関しては見当がついてるのだけれども、訳あって今までそれをスルーしていた。

んで、そろそろいいかなと思つてなのはちゃんに話を振つたわけだが……………目が泳いでたり焦りが見えたりと隠しきれていない。

おもいつきりアリサちゃんに怪しまれる始末である。

まあ、その辺は後でフォローできるし、そろそろ話したクイズを出そうと思つたら、私の目の前に浮遊する携帯端末のパネルみたいなものが小さな筒をぶら下げつつ、いきなり出現した。

「うわわっ!?!なによコレ!?!」

「びっくりした………いったいどこから?」

「ああ、これはあいつの………ロゴないけど分かりやすいわね」

「あのバカいきなりなにやってんだか………どれどれ………?ああ、現物確保してたのか、丁度良い、クイズにコレも出しとけ」

永次郎がパネルと筒の中身を手慣れたように探ると、そこから一つの石を取り出し、私に投げ渡してきた。

それを見て私は其が何かにすぐ気がつくのだが、それと同時になのはちちゃんの顔がひきつったのも見逃さなかった。

「さて、ここで三人にクイズです、今手に入れたこの石を含めて、今の場に4つ、透明なケースにいれた物を置きました、実はこの内1つ以上は、本来子供に絶対触らせちゃいけない危険な物です、さあどれでしょう?」

私はさつき渡された青色に輝く菱形の宝石をその場に召喚した円筒形をした透明の筒に入れ、その他に紫色の金属で出来たメダル、淡い緑色に近い色で発光する「T」の字をした白い金属、透明感のある青い涙滴型の結晶を、それぞれ同じ形のケースに別々に入れ、なのはちちゃん達に見せた。

その時のなのはちちゃんは、もはや焦りを隠せない領域に至っていた。

答え合わせ、そして・・・

いきなり三人に振られた問題、魔法についても殆ど分からない二人（二人は分かる）にやらせるにはあまりにも酷な内容（実はコレの正答を知っているのは私と永次郎、そして今、この地球にはいないもう一人しかいない。）だが、アリサちゃん、すずかちゃんはうんうん頭を捻って考え始める。

- ①青色に輝く菱形の宝石
  - ②紫色の金属で出来たメダル
  - ③淡い緑色に近い色で発光する「T」の字をした白い金属。
  - ④透明感のある青い涙滴型の結晶。
- 危険か否かを判断するのはこの四つだが、言わずもがな1はジュエルシードである。

ヴェルダンによって送られてきたデータや、私の魔法使いとしての見識から見れば、コレが一般的には超のつく危険物であることはすぐに分かる。

しかし、そんな情報知る由もない二人にとって、これはただの青い宝石でしかない。

これは他の物品にも言えることだが、完全初見では既に発光している③を除けば、危険か否かの推測を建てることは困難を極める。

故に、彼女達の行動は早かった。

「アウドムラさん、質問いいかしら？」

「勿論、答えに直結しない程度なら幾らでも答えてあげるわよ？」

「それじゃあ一つだけ、今回の問題におけるアウドムラさんにとっての危険物って、どんな基準かしら？」

「そうね、永次郎も同じ基準なんけども、基本的には使い方をミスったりすると即アウト、あるいは現物の現状的には触れると悪影響は確実な物が今回該当するわね、ってか一つだけだけど、触るところか近

くにあるだけで大変なことになるものも……………」

「……………そんなもの私たちに見せてるの!?!」

「まあ、その容器は方に1つもアリサちゃん達の力では開けたり、壊されたりしないようになってるしね、私なら開いたら開いたで対処できるけど。」

「えええ……………」

さらりと超危険物を見せてる私に思わず驚く二人、対処できると言う事実を言ったら軽くアリサちゃんに引かれてしまった、っていうかなのはちゃんいつまで固まっているの？

「え…………ええつとお……………これ、どうしよう……………?」

「じ、じゃあ具体的にどんな危険を伴うものなのかって教えて貰えるの?」

「一番危険な代物を一つだけぼんやりと教えて上げると、近くにあるだけで街中がゾンビパニックも真っ青の大惨事を引き起こすわね、いま使われている容器は、そんなレベルの超危険物を処理する前の一時保管の為に用いる代物だから、とりあえず現状は問題ないわ」

「……………え?」

超危険物だとは聞いたけど、そんなにヤバいものを見せてたの!?!と言わんばかりの驚愕の色に染まる三人、対処に難儀してあたふたしてたなのはちゃんもこれにはビックリしたらしく、気がつけば二人よりも遥かに真剣に四つの封されたものを見つめるようになっていた。

「うーん……うーん……これは……」

「…ダメね、判断基準が少なすぎるわ」

「これ、色とかは判断基準になるのかなあ？」

「はくいそろそろ時間切れく、山勘でも何でも良いから取り敢えず答えを出してもらいましょく」

三者三様に答えに難儀する中、三人の様子を見ていて永次郎が何かを察したらしいのだが、それがなんなのかまではあえて問わず、時間切れを宣告し、答えを聞くことにする。

何かをひたすら迷っているのはちゃん、ヒントが少な過ぎて答えを導き出せてないアリサちゃん、何かしらの判断基準で答えを導き出そうとしているすずかちゃん、そして三人は順番に答えを出して行く。

「私は、②番と③番かなあ？と思います、3番は既に光ってるらその光が危険なんじゃないかなというのと、2番は紫色をしてるのでなんとなく……」

「私は①、③かしら？三番が露骨に光ってるのが気になるし、1番は4番と似て見たただけだと危険そうには見えないけど、問題の趣向を推測するに多分どっちかが危険物っぽく感じられたから、後は勘でつてとこ？」

うーん、惜しい、アリサちゃんもすずかちゃんも事実上当てずっぽうになるのに一つずつ正解を当てている、露骨なトラップ扱いで3を伏せてみたら見事に引っかけちゃったって所ねく

「……………1番と2番です」

「……………へ？」

「答えは1番と2番、多分、話に出ていた特に危険なのは2番かな？って思います」

「根拠は？」

「……なんとなく……なんですけれど……」

「ほほーう？成る程ね、それじゃ正解発表、丁度いいから選ばれなかった4番から順に正解発表するから解説は永次郎宜しくねd( >▽ < )」

「え？俺!？」

答えを出したので正解発表、答えはそれぞれの物が危険物なのかどうかを解説交えて一つずつ説明する方式にした、誰も選んでない4↓なのはちゃん以外の2人が選んだ3↓なのはちゃんが選んだ2つと流れを組みやすいので4から1の順に解説をいれることにする。

いきなり解説を振られた永次郎が驚いているが解説能力は私よりあるので問題なしとして解説を始める。

「取り敢えず誰も選んでない4だけど、根本的に大したモノじゃ無いので選ばないのが正解、よって三人とも正解ね、」

「これは飛行石と呼ばれている特殊な鉱石の結晶でな、本来は空気に触れた瞬間に鉱石が持つエネルギーが反応して小さく光るだけの代物なんだけれども、こんな感じに結晶として加工すれば軽い衝撃を与える事でいつでも使えるライトになる代物なんだ、まあ、文献とかを漁ると、使い方次第で人を浮遊させることすらできるらしいんだけど、そんなことができたと言う話は聞いてないから今のところはその透き通った色合いと稀少さから専らアクセサリとして用いられているねえ」

そう言うと、永次郎は飛行石の入った筒を強く振り、中の石を筒に強くぶつけた。

直後、強い青の光が部屋を照らし始めたのである。

「凄い……部屋中が青くなってる……」

「……私、こんなに綺麗に光る結晶なんて見たことないんだけど……？」

「結晶化加工の難易度が非常に高いのと、鉱石の方すら取り扱い業者でも殆んどお目にかかれないレベルで流通量が少ないのと、結晶化前の鉱石でさえとつくの昔に掘られなくなってたものが近年再発見されたばかりなマイナー鉱石なせいによる認知度の低さが相まって殆んど入手出来ないからねえ、ぶっちゃけ今のとこ産出する鉱山一箇所しかないし……」

「本当だったら三人に似合いのアクセサリーとして良さげだからあげても良かったんだけど、私の知り合いに依頼されて保管してる物だから渡せないのが残念、って所かしらね」

本当はその鉱山が別世界の鉱山であり、つまり異世界の鉱石であるためこの世界での所謂お金持ち（永次郎談）なアリサちゃん達でさえお目にかかった事がないのは当然の話なのだが、そのことを言わずに誤魔化して見せたのは永次郎らしい空気の読み方と言うべきだろうか。（ちなみに異世界産だと言っていないだけで後の事は大体事実である）

「次、3番なんだけど結論から言うところいつもそこまでの危険物じゃないわ、残念だけれども危険物と判断したすずかちゃん、アリサちゃん共に不正解ね」

「し、しまったあ……見た目で危険物っぽく見せるトラップの方があ……」

「アリサちゃんの言うとおり、露骨に光ってるから危険物じゃないかな的なムーブメントを誘導したトラップとして用意されたのがこのサイコフレームと呼ばれる合金だねえ」

「これは人の精神感応波をに反応して強度が恐ろしく跳ね上がる合金なんだけれども、使い方次第なら相手にテレパシーじみて意思を伝える中継機構になりうることや、下手をすれば宇宙空間で一定方向に動

いている小惑星規模の隕石を進行方向の逆側に引っ張ったりだとかのオカルト染みた事が出来る事判明している代物だ」

「実は今のように光ってる状態だとそれができるのだけれども、そんな意味不明なレベルの本領を發揮するには非常に精神感応波の強い人物が何人も必要になるもんな上、それだけ感応波が強い人物なんて殆ど見かけれない為、本領を發揮できない代物となっている、ま、そんなわけで現状だと危険ではないのでこれもセーフ扱いって訳だね、個人的には危険物扱いで良くね?とか思ったりはしてるが…昔からアウドは一貫してセーフ扱いしてるしなあ、てかなんでコレ光ってるの?」

「んで、残った1番2番が問題の危険物、よってなのはちやん正解!おめでとー(\*^▽^)/★☆☆♪」

「何でこんなクソヤベエ奴が保管されてるんだオイ…ゴホン、先に2番から解説するんだけど、こいつの名はゾンダーメタルって言ってるね、元々は別の遠い星で製造されたストレス対策用のシステム媒体の一つだったんだけど、肝心のシステムが大暴走を起こしてそんじよそこらじゅうの物を有機物無機物関係なく機械と生命体の合の子みたいな奴にして支配下に置いてしまおうとか言うヤバいつレベルじゃない代物となってしまうたのがこの金属なんだ。」

「……と、ういか本来はそんなレベルで済まされない位にヤバイ代物なんだが、アウドがいるからなあ……」

「まあ、これくらいはねえ…あらら、やっぱりと言うかなんというかもう三人とも完全にフリーズしちゃってるわね……( 皿、;ま あいいかつと…」

最早子供の脳ではどうあがいても追い付けそうにないヤバイ代物の説明をされた為に、返す言葉を失っている三人を心配しながらも、私はゾンダーメタルの入った筒を握り、「筒を破壊してゾンダーメタルを握り潰した」



「え?」

「えっ!」

「へ?」

「おまつ……、( 〇、 ; )ノ」

そして握り潰した手を開くわけだが、そこに超危険物と言われた代物は既になく、あるのは私の手のひらだけ、

よーするにこいつの【処理】を今済ませてしまった訳だが、三人とも握り潰した手をまじまじと見つめ続け呆然とし、思わず永次郎も呆れてしまっていた。

「……あの……さっきのものって一応触るのも危険な物なんですよね?」

「そうよ?」

「…私、目がおかしくなったのかしら?今、そんな代物を素手で握り潰したように見えたのだけれども」

「ああ、さすがに素手はゾンダーへの抵抗が面倒だから手のひらにうすーく魔力纏わせて潰したわよ?まあ素手でもできなくはないけど」  
「……おじさん、今のって普通に魔力纏わせれば出来るの?」

「無理、だーからこいつは例外だの何だのと言ってるワケよ、今の様子だと到底危険物に見えないけど処理してるアウドがゾンダーと比較して遥かに異常過ぎるだけで、ゾンダーもゾンダーで相当だからな?」

ああ…成る程、散々危険性を指摘した話の割に余りにもあっさり処理されたから目の前の光景を疑わざるを得なかったわけか、まあいいや、せつかくだしこの混乱の隙についてなのはちやんの核心に直撃してみましようか?

「さて……正直今のは色々これから言う話を不思議に思わなくするための前置きみたいなものだったわけだけでも、実はちよつと予



「な、な……………な……………なの……………」（ボタンキユ〜）」

あ、倒れた。

「……………アウド、いつから気づいていた？」

「魔力反応を感知したときには薄々気づいていたわよ？まあ確信したのは三人が店にやって来た時だけでも」

「（ロー）ハア……………もういいや、ぶつちやけ聞こう、それぞれの魔法適性形式とアウド私見の才覚はどんな感じだ？」

衝撃の事実による自爆シーンを見てしまい口をパクパクさせることしかできない二人と、（恐らくは）家族や親友皆に隠すつもりだったであろう秘密を自爆してしまってもうダメだー！と言わんばかりに気絶したなのはちゃんを他所に、もう色々と諦めて話を巻きにしようとストレートに聞き始めた永次郎に既に得ている情報を次々と解き放つ。

「この子達、本当に面白いわよ？なのはちゃんは純正ミッドチルダ式、ざっと見た他のご親族に反応がなかった辺りからして突然変異型のコア持ちね、才覚はまだ測ってないからわからないけど、これまでの反応からして多分もう事件に首ズブズブだったりするんじゃないかしら？」

「……………だろうな、なのはちゃんはコレでいて驚くほど我慢強くて頑固な子だ、こんな代物の存在を知っていて、そして、自分でそれをどうにか出来るのなら暫く迷ったとしても首を突っ込むだろう、下手すれば無茶と解つていても迷わず突貫するまである、【集めてる】なんて言葉をポロリと溢すんだ、完全に事件の渦中にいると考えるべきだな……………よりにもよってなのはちゃんが巻き込まれるとかウエルダンの野郎後で覚悟してやがれよ……………（ωゝ＃）」

「次のすずかちゃんだけでも、前置きとして開幕から氷への魔力変換能力一丁」

「氷結魔力変換資質!?……アカン、下手こいたら仁義なき争奪戦待つたなしや／（＾o＾）＼」

「んで、更なる爆弾として適性形式なんだけでも、よりにもよってアイツの言ってた【超自然型機関式】、他に数名くらいしかマジで確認してないレアタイプなんだけど……」

「ええ……」

「挙げ句の果てにこの子吸血鬼の特性持つてるじゃない……この子、魔法の習得ルート次第だとアイツやラルゴのじーさんもビツクリの要塞と化すわよ？てか吸血鬼特性が遺伝性である事から逆算するところの子のご家族も似たり寄つたりの凄惨一族の可能性があるわね、ご家族も要確認かしら？」

「おまつ、おまつ!!?!?!?!」

すずかちゃんの適性話に加えて、大体把握したての情報参考程度に永次郎に投げたら、彼は突然大声を上げた後、絶句してしまつた……え？なんか不味いこと言つた？吸血鬼特性位、対象の魔法適性を見るくらいしつかりとその子を見れば勝手に判明する物なんだけれども……まあいいか。

「最後にアリサちゃんなんだけれども……まあ、比較的普通なモノとして炎熱変換資質、次点で適性形式が【起源魔法】、いっちゃんヤバイのはこの子が殆ど確認事例のない【焔の魂】を持つてる事かしら？」

「起源魔法てマジか、マジかあ……しかも【魂】系列の稀少スキル持ちとかアリサちゃんもアリサちゃん仁義なき争奪戦始まりかねないやんけ……（x|x）」

「能力を加味すれば……まあ、件の三勢力による取り合いになりかねないのは確かねえ、まあ、三人の可能性に関しては【どこもかしこもが欲しがる】と言う認識で間違いないわ」

「……………そうか、そうかあ……………そうだよなあ……………（ガタリ）」

「永次郎？」

一通り適性関連を話終えた途端、永次郎が立ち上がった。

「正直、この件でなのはちゃんを責める事は出来ん、なのはちゃんが隠していた内容は余りにも重過ぎるし、アウドの話が本当ならば、もう色々と此方も隠していたのをブツパしなくちゃならん」

「え？色々って、こつちならその必要性はないからゆつくり出来るんじゃないかったの？」

「残念ながら、そうではなくなってしまった、と言うわけだ、なのはちゃん、一ついいかい？」

「……………何ですか？」

「あれ？いつの間に復活？」

気がつけばなのはちゃんが永次郎と話せるくらいに持ち直していた、ただ、その顔には諦観のそれが浮かんでるようにも見えた。

「時空管理局、このワードに聞き覚えは？」

「……………リンデイさん、アースラ……………おじさん色々と物知りだから、魔法が解るのならコレで多分……………わかると思う……………」

「……………（ωωω）、そうか、もうそこまで事が大きくなっていたか……………今更ながらウェルダンに輸送船の件が何日前の事だったのか聞いとけば良かったなあ」

リンデイが時空管理局のリンデイ・ハラオウン、アースラが彼女の乗っているL型巡航艦【アースラ】なのだろうとは思ったが、【あの艦隊】が展開してるのに管理局の艦が地球に近寄れるのだろうか？

「アウド、覚悟しておけ、ほぼ間違いない、アースラはウエルダンの言っていた件を補足した管理局の艦だ、次元震案件なら【あっち】は専門に任せるからなあ、普通に駐留艦隊と交信して次元震案件なのを伝えて下がって貰ったんだろう、と言うかそんな展開じゃないと管理局とは言え追い出される筈だからな」

「あー、成る程ね？そう繋がるのか……ウエルダンえ……」

ウエルダンから話を聞いたのはつい昨日だが、今日現地に来てみればもう既に事は管理局の介入すら引き起こしている……となると輸送船の件は少なくとも1〜2週間は前の事だったんだろう、すつかりと忘れていたが、そもそもウエルダンの艦で地球に逆探を避けつつ通信を送るにはかなり地球に近づかないといけなくて、ウエルダンは管理局とかに補足されないように移動するために更に時間がかかるから……話を聞いてた時にはもう既に……つて寸法な訳だ……それで一番通い慣れたセーフハウスがオジヤンになるとか泣けるってレベルじゃないのだけでも。

「事がでかくなりすぎてる、管理局が出るのは予測していたが、よりもよってなのはちゃんが渦中……【彼処】の連中が知ったらウエルダンの奴チマツリにされるんじゃないやねえかなあ？てかそうじゃなくてもウチの連中だとボコボコにしかねんと言うのがなんとも……!!?!」  
ん？どうしたのかし……

「(ムンズツ)……アウドさん、コレ、どういうことなのか説明してもらえるのよね？」

「(。)。へ？」

ぶっちゃけに度が過ぎたのか、永次郎が色々悟った顔をして呟いた直後、なのはちゃんに注目していて見落としていたすずかちゃんとアリサちゃんの2人の方を見て驚愕で目を見開いた彼を見てそちらに振り向こうとする直前に肩を思いつきり掴まれた。

直後、アリサちゃんからの一言と共にただならぬ気配を感じて慌てて振り向けば、そこには逃がさないと言わんばかりに片手で私の頭を全力で押さえようとしつつ、もう片方の手で自分の心臓近くの胸で赤く燃える炎を、手に溶け込ませるかのように覆っているアリサちゃんと、何かを決心したのか、真っ直ぐに私を見つめているすずかちゃんの姿であった。

そして直後、永次郎の持っていた携帯から驚くほどの大音量にてとある警報が流れたのだ。

(ちよっ…この警報、【起動音】のじゃない！二人の様子からして両方とも本格起動したって事!?)

「(ムンズツ) 教えて貰えますよね?」

真剣な表情を崩さずにもう片方の肩を掴んでくるすずかちゃん、つてか痛い痛い痛い！この子吸血鬼とは言えこんなに力強い?! 永次郎曰くなのはちゃんと年齢変わらないのにコレだけのパワーとか流石に驚く。

「アイタタタタタ!!二人ともそんな事しなくても教えるわよ!!最初からそのつもりでこの話をしたんだから二人とも落ち着いてアイタタタタタ!!」

取り敢えず超痛いので離して貰ったのだが、二人はもう既に少し前の口をぱくぱくさせていた少女とは思えないほど真剣な表情で目を瞑って自分の感覚を研ぎ澄ましているようだった。

その直後、胸で燃えていた炎が消え、何かを感じ取った様子のアリサちゃんと、目をつむったまま何かをやり始めたすずかちゃん…二人に何が起きているのかに…それに私は気づいた。

(……………うっそお、アリサちゃんのスキルとすずかちゃんの魔法適性が完全覚醒してる…………)

説明が長くなるので分かりやすく二人が今どれくらいヤバイのかを表現すれば、現状のなのはちゃんを基準とした場合、二人に多少モノを教えればそれにあっさり追い付いてしまうくらいである。

「感覚的にはコレでよし…かしら？…すずか、さっきまでのアウドさんの話、どのくらい理解できた？」

「多分今の私じゃ殆ど理解できてないと思う、超自然機関って何の事なのか、どこもかしこもって言うけど具体的にどういったところなんですとか、疑問に思うことはいっぱいあるよ？」

「…だけどね？アリサちゃん、おじさんやなのはちゃん、アウドムラさんが話してくれた事からは幾つかわかったことがある」

「そうね、そうよねすずか………」



「1つ！この世界の他にも幾つもの世界があると言うこと」

「2つ、この世界には魔法があつて、なのはちゃん、私、アリサちゃん、アウドムラさんはそれを取り扱える才能があると言うこと。」

「3つ！、最近近辺で起こっていた謎の出来事の数々はこの魔法に絡んで起きた出来事である事」

「4つ、今この時まで、私たちはなのはちゃんの行動の変化が、それを何とかしようと必死になって戦っていて、それを知られなくなかった事が原因と言うことに気がつけずにいたこと」

「そして5つ！、なのはは、これまでの日常を壊したくなかった為に必死になって秘密にしていた全てが、おじさんとアウドさんの手で一番知られなくなかった人に知られてしまった事……」

「最後に6つ！知ってしまった当の本人たちは、そんな友達の事を見て見ぬ振りなんてできないって事！」

あっ……（察し）

「アリサちゃん？すずかちゃん？うおおおっ!?」

二人が大声で叫んだ直後、またしても永次郎のケータイか  
らけたたましい警報音が鳴り響き、アリサちゃんが赤い炎に、すずか  
ちゃんが1つの巨大な氷塊に包まれ、何が起こったのかをある程度察  
した私はその場で周辺一体に面倒が広がらないように魔法で処置を  
施す。

直後、辺りは水蒸気と光に包まれ……

「え？……え？すずかちゃん？アリサちゃん？」

「……………ナンテコツタイ／（＾o＾）／」

「おお……いきなり形成触媒無しでバリアジャケットを形成するとは  
……これは楽しみな子達ね……」

「なのは!」

「なのはちゃん!」

「バリアジャケット!?すずかちゃん？アリサちゃん?……………ナ

ノーツ!? (?!? : : : )

「……アウド、すまんが少しの間二人を頼む」

「…永次郎?」

「……もう決めた、アイツの事を信じて、話せるだけを話すことにする、夜が長くなるぞ、備えとけ。」

「え? ちよつと! 永次郎!」

バリアジャケットを纏った二人は、そのまま私たちを半ば無視してなのはちゃんに抱きつく。

いきなり二人にもみくちやにされることになったのはちゃんと、途中から最後まで呆然としっぱなしのフレット、そんな光景を見て、それまで悟ったのと同時にヤケクソ気味になっていた表情から一転し、ある意味いつもの、職人を思わせるような真剣な眼差しになった後、端的に告げて覇天達の応対をしている土郎さんの元へと向かっていった永次郎。

「……やっぱあ、永次郎があそこまで真剣になるなんて……もしかして相当やらかした?」

永次郎があそこまで真剣になるのは基本的に余程の事が原因になっている、「自分の滞在している世界に巨大隕石が落ちようとしている」だの、「やべえ奴らにやべえ物が渡って次元世界の危機」だの、取り敢えずそんなレベルでないと、彼処まで真剣になることはまずないのが永次郎だ。

永次郎をそこまで追い込むなんて失敗したなあ……と思いつながらも、最早巻き戻してもどうにもならない領域。

仕方無いかと気がつけば涙目で話し合っているのはちゃん達を見守りつつ、永次郎の戻りを待つことにする……

【side out……】

なのはちゃんが魔法に正面から関わっていた。

ハッキリ言えば、関わってほしくはなかった……：……  
が、事の発端が私の友人の失態である以上、最早それを止める術は無い。

ましてや時空管理局と関わりあってしまったているのだ、友人達のやらかしに色々関連してた都合で、重要参考人として友人共々、或いは友人達以上に重要な指名手配人になってしまっている、と言う私の実体が伝わるのも時間の問題になる。

そんな事も含めて、士郎に隠していた事は多いが、アウドが色々とやらかしたお陰で、それらがある程度纏めてブツパする丁度いい機会が不本意ながら出来てしまったのだ。

ロストログアの襲来と、それに伴う管理局の出現、更に、現地にアウド曰く【優秀】な魔導師が出現した事……：……挙げ句の果てになのちゃんの友人に【魂】持ちと【超兵器反応】……：……時空管理局だけでは無い、近隣次元に一個艦隊を半ば休暇配置扱いで配備している【エリトリア連邦共和盟主帯】にも動きが出るだろう、今の地球圏にそれらが干渉した場合、地球圏にそれをはね除ける力は無いはずだし、それら【三大勢力】が不干渉方針を維持すれば【時空犯罪者には関係ないの法則】が発動してにつきもさつきも行かなくなってしまう。

只でさえ【あの頃】から地球圏はアウド達とは別の……それこそ一般的な異世界の犯罪者達の巣窟になりかける危機にあったのだ、【まだこの星が誰にも注目されなかった】……いわば次元世界の【田舎】扱いだっただの頃から、ずっと……

「はあ……………（一ドル） 3」

深くいため息をつく

実のところ、近年の次元世界の犯罪事情がどうなっているのかを多少なりとも把握している私からすれば、地球圏には今、まさに大きな危機が訪れようとしている（下手すれば既に危険域に入っている）と言え、そしてその危機は時空管理局などの大勢力では対処が困難であることが容易に想像つくものであった。

下手なロストログア案件よりも遥かに危険と言えるソレを避けるためにも、地球圏：故郷には本当の意味で【ただの田舎】であつて欲しかったのだが、今回の事件が……とりわけなのはちゃん達が地球圏出身の優秀な魔法使いであることが広く知れ渡れば、非常に不味いことになる……………。

「おう天城、取り敢えず話は終わったのか？」

「……まあ、大体はな」

「さっきの気配の質と、お前のそのいつもの面と併せて考えるとすると、やはり余程の事らしいな？」

「……土郎達にも説明しなければならん程だ」

「それなら既に多少は済ませておいた、お前に確認が取りたいとオーナー夫妻は話してたぞ？」

「…オイマテ、どのくらいまで話した？」









その後、気がつけば私は気絶したまま月村邸に輸送されており、そこには高町家、月村家、バニングス家の3家が揃い踏みし、緊迫の状況下にて、私にとつての更なる修羅場が待っていたことを追記しておく。

【side out……………】